

---

# ルサールカ

坂田火魯志

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】  
ルサルカ

【Nコード】  
N4142F

【作者名】  
坂田火魯志

【あらすじ】  
妖精でありながら人間の国の王子に恋をしてしまった水の精ルサルカ。決して話すことのできない彼女に怒った王子はつらくあたり恋は破れてしまう。嘆き悲しむルサルカに起こった奇跡とは。ドボルザークのオペラを小説にしました。チエコオペラの傑作です。こちらにも掲載してもらっています。

<http://www.painwest.net/>

## 第一幕その一

### 第一幕 愛の目覚め

深い緑の森の中にその湖はあった。青く静かな水面をたたえて。今そこに緑の服を着て緑の髪に緑の目を持つ三人の木の精達がやって来ていた。

「やっと夜になったね」

「うん」

彼等は湖のほとりでまずは夜空を見上げて話をしていた。

「夜になれば月が出る」

「見なよ、湖に」

三人の中の一人がここで湖面を指差す。

「その月が」

「今日の月は銀色か」

「そうさ、白銀の月だよ」

彼等は口々にそう言い合う。

「湖の底にある石まで照らし出して」

「奇麗に輝いているね」

「お月様は湖の上で」

「湖の中まで照らし出して」

「そして僕達に奇麗なあの娘を呼んでくれる」

言葉が紡がれていく。

「あの水の精を」

「岸边まで呼んでくれるよ」

「さあ早く」

「奇麗な妖精さんさあここに」

「これこれ」

「おや!？」

三人の木の精達は湖の中から誰か出て来たのを見てそちらに顔を

やる。だが出て来たのは美しい水の精ではなかった。同じ水の精であつても年老いた男の精霊であつた。

「何だ、お爺さんか」

「ちえっ」

木の精達は彼の姿を見てふてくされた顔をしてその場にしゃがみ込んだ。青い服に苔の生えた杖を持つ老人だつた。禿げ上がった頭に青い髭、そして湖と同じ色の澄んだ色の目を持っていた。

「そんなに騒ぐでない」

「だつてさあ」

「僕達あの綺麗なお姉さんに会いたいんだよ」

「だからここにいるのに」

「またか」

水の精のお爺さんはそれを聞いてやれやれと溜息をついた。

「そう言つて毎晩来るのう、御前さん達は」

「だつて見てて飽きないから」

「あれだけ綺麗だと」

「なあ」

「まあわしもな。若い頃は」

昔を懐かしむ、そんな笑みを浮かべて語つた。

「御前さん達の頃は毎晩湖から出て御前さん達のお婆さん達と遊ぶでおつたわ」

「ああ、それ聞いたよ」

「お爺さんもてたんだつてね」

「ほっほっほ」

三人の言葉に顔を綻ばせて笑う。

「良い思いでじゃよ」

「けれど今はどうなの？」

「やっぱり枯れた？」

「枯れたとは失礼じゃな」

その言葉には顔をむっとさせる。

「わしだつてまだまだな」

「まだまだな」

「何!？」

木の精達はお爺さんをからかうようにして顔をそれぞれ向けてきた。明らかに年寄りだと見て舐めてかかっている。

「もうそんな御歳なのに」

「うちのお婆ちゃんだつてもうヨボヨボなのに」

「まだまだ若いなんて言わないで下さいよ」

「つてもう言つてるよ」

「あつ、そうか」

「いい加減にせんか、この悪ガキ共」

「おっと、これは失礼」

「申し訳ありませんでした」

悪戯つぽく頭を垂れて言う。

「全く、悪ふざけばかり覚えおつて」

「まあまあ」

「謝つたんだし許してよ」

「で、何の用なのじゃ？」

誠意なぞ全く見られなかつたが人のいいお爺さんはそれを許した。そしてまた木の精達に対して声をかけた。

「だからそちらの娘さん達を見に」

「やはりそれか」

「邪険にしないで」

「同じ森の仲間じゃないか」

「しかし御主等毎日来ておるじゃないか」

「だつてなあ」

三人はその言葉に顔を見合わせる。

「水の精霊つて可愛い娘多いからなあ」

「そうそう、女の子はやっぱり水の精」

彼等は口々に言う。

「それが一番さ」

「若い頃のわしとそっくりじゃな、全く」

彼等のそんな言葉を聞いて苦笑いを浮かべる。

「そうしたところは」

「じゃあ一人紹介してよ」

「お爺さんがさ」

「ああ、駄目じゃ駄目じゃ」

だがお爺さんはそれを受けようとはしない。左手を左右に振ってそれを断る。

「恋は自分で見つけるものじゃ」

「自分でって」

「何だよ、紹介してくれないのかよ」

「好きな人ができてからわしのところへ来るがいい」

「それどういふこと？」

「話はそれからのじゃよ」

お爺さんはにこりと笑って木の精達に言う。

## 第一幕その二

「まずが誰かを好きになる。それがはじまりじゃ」

「はじまりって」

「そうしたらまた来るがいい。よいな」

「何だかよくわからないけど今は駄目ってことか」

「左様」

こつ答える。

「じゃあいいよ」

「好きな人なんてすぐに見つかるしな」

「そうだな。じゃあその時にまた」

「待っておるぞ」

そんなやり取りの後で彼等は別れた。お爺さんが湖の中に戻ろうとすると水面に一人の青い髪の少女が現われた。

青く軽い服を着たその少女は青髪を湖まで垂らしていた。顔は雪の様に白く大きく目立つ目をしている。その目は青く湖よりも澄んで青かった。唇は薄い赤でありそこが儂げな印象を与える。そうした少女であった。美しいが今にも湖に消えてしまいそうな姿であった。

「お爺さん、どうしたの？」

その少女はお爺さんに尋ねてきた。

「誰かとお話していたみたいだけれど」

「大したことはないよ、ルサルカ」

お爺さんはその水の精の女の子の名を呼んで安心させた。

「また木の精達が来たただけだから」

「そうなの」

「ところでルサルカ」

お爺さんはルサルカを見て言った。

「この前言ったことだけれど」

「駄目かしら」

「よくはないね。考え直してはどうかね」  
お爺さんは優しい声でルサルカにこう言う。  
「御前は優しい娘だから。人間の世界に行ったらいけないよ」  
「人間が悪いことばかりするから？」  
「そうさ。御前みたいないい娘は騙されて酷い目に遭う。だから絶対に行ったら駄目なんだよ」  
「じゃあずつとここで」  
「ここの何処が不満なんだい？とてもいいところじゃないか」  
杖で湖だけでなく森全体を指し示した。  
「青い湖に緑の森。仲間達もいて」  
「それはそうだけれど」  
ルサルカは俯いてお爺さんに答える。  
「けれど私は」  
「ここには皆いるじゃないか」  
お爺さんはまた言う。  
「御前の姉さんや妹達が。皆もいるのに」  
「けど」  
「人間と精霊は結ばれないんだよ」  
「結ばれないの？」  
「そうさ。人間はね、あの神様を選んだから」  
「神様が違うから」  
「うっん、それよりずっと昔からかな」  
お爺さんは悲しい顔をしてこう述べた。  
「人間と精霊が仲良くなっても。最後に待っているのはいつも悲しい話ばかりなんだよ」  
「いつも私達に言っていることよね」  
「そうさ。だから人間を好きになっちゃいけないんだ」  
「けれどあの時のあの人は」  
ルサルカは言う。  
「あの人ってこの前ここに水を飲みに来ていたあの王子様かい？」

「そうよ、あの人。あの人のことが忘れられないのよ」  
「忘れないと駄目だよ」

お爺さんの顔は悲しいままだった。むしろ悲しさが増していた。  
「さもないと。気の毒な思いをするのは御前なんだよ」  
「けれど」

「けれどもどうしたもないんだよ」

お爺さんはさらに言う。

「可哀想なことになってしまつよ」

「それでも……いいわ」

ルサールカは思い詰めた声で言った。

「あの王子様と一緒になれるのなら」

「本当にいいのかい？」

「ええ」

迷いはあつたがそれでも。意を決した顔であつた。

「あの人が好きだから。それでも」

「ルサールカ……」

お爺さんは首を横に振った。空しそうに横に振った。

「馬鹿な娘……」

「御免なさい、けれど」

「もういいよ。じゃあ御前は御前の好きなようにしなさい」

「お爺さん……」

「そのかわり。何かあつたらわしがいるからね」

お爺さんは言う。

「何時でも。わしが側にいてあげるから」

「有り難う、お爺さん……」

「それだけは忘れないでおくれ」

「ええ」

「じゃあね。それじゃあ」

お爺さんは悲しい顔のまま湖の中へ戻っていく。ルサールカは湖の上に一人となった。

### 第一幕その三

「白銀のお月様」

ルサルルカは夜空を見上げた。そこには白銀の光をたたえる月があった。その優しい光を夜空に照らしていた。青い湖にも銀色の光を与えている。

「あの人もお月様の下にいるのですか？ だったらこの想いお伝え下さい」

月に対して語り掛ける。

「貴方を抱き締めたい、例えそれがほんの一時だとしても。そして夢の中私のことを想って欲しいと。私の願いをあの人にまでお届け下さい。そして」

さらに言っ。

「私はここで待っていると。あの人にお伝え下さい。それが私の願いです」

月は何も語らない。その優しい光をルサルルカに見せているだけだ。

「あの人と私の想いが混ざり合うように。お願いします」

そこまで言う姿を湖の中に消した。中へ中へと入っていく。

湖の中は一つの世界だった。精霊達の家々があり皆そこで楽しく遊んでいた。ルサルルカはその上を泳ぎ先へと進む。そして一つの狭く暗い洞窟へと入って行った。

洞窟の中も水に満ちていた。その中を泳いでいく。まるで飛ぶように。やがて奥にある一つの部屋にやって来た。

「おや御前さんは」

そこには一人の老婆がいた。皺だらけの顔に木のようになった手、そしてその身体を濃い青の法衣で覆っていた。

「珍しいじゃないか、こんなところまで」

にこやかに笑ってルサルルカに語り掛ける。

「何か用があるのかい？」

「はい」

ルサールカは澄んだ声でお婆さんに応えた。

「ねえお婆さん」

「何だい？」

「お願いがあるのだけれど」

ルサールカは言う。

「お願い」

「ええ。実はね」

「わかったよ、恋だね」

お婆さんはすぐにそれを見抜いた。

「誰かを好きになっただね」

「それは」

「おっと、今のでわかったよ」

その白い顔を赤らめさせたのを指差して笑って言った。

「そうかい、御前さんにもね」

お婆さんは目を細めて笑う。

「恋をする時が来たのかい。嬉しい限りじゃよ」

「え、ええまあ」

ルサールカは戸惑いながらもそれに答える。

「そして相手は誰だい？」

「言っても驚かない？」

「何で驚くことがあるんだい」

お婆さんは顔を崩して笑った。この時はまだ大したことではない  
と思っていたのだ。

「恋をするのは私達の若い時の仕事なんだ」

「そうよね」

「さあ行つて御覧。相手は誰なんだい？」

「王子様なの」

「王子様！？」

こう言われても最初は何なのかわからなかった。

「そう、王子様」

「水の精霊のかい？」

「ううん、違うわ」

「じゃあ木の精霊の」

「それでもないわ」

「はて」

続けて否定されると何のことかわからなくなった。

「じゃあ一体誰なんだい？何処の王子様なんだか」

「時々ここに来られる王子様なの」

「まさか」

それを聞いて顔を暗くさせる。

「そう、人間の王子様なの」

「馬鹿を言っちゃいけないよ」

お婆さんはお爺さんと同じことをルサルルカに言った。

「人間と精霊は一緒にいたらいけないんだよ」

「けれど」

「駄目って言ったら駄目さ」

お婆さんはルサルルカを宥める。

「私達は人間とは一緒になれないんだ」

「けれど」

「けれどもどうしたのもないんだ。不幸なことになるよ」

「それでもいいわ」

だがルサルルカはそんな苦難もものとはしなかった。

## 第一幕その四

「だって。私はあの方が好きなんだから」

「人間でもかい？」

「ええ」

返事にも迷いはなかった。

「あの方が人間でも私が精霊でもいいの。あの方が好きなの」

「本当なんだね？」

「本当よ、嘘は言わないわ」

その言葉にも迷いはなかった。

「絶対に」

「そこまで言うのかい」

お婆さんはルサルカの決意が固いのを見て取った。

「絶対に一緒にになりたいんだね」

「ええ、だから」

「おっと、そつから先は言わないでおくれ」

ルサルカにそれ以上話させなかった。

「御前さんの決意はわかったから。いいね」

「それじゃあ」

「仕方のない娘だよ」

その顔も声もやはりお爺さんと同じだった。悲しいものだった。

「どうしてこんなことになったのやら」

「御免なさい」

「だから謝らなくてもいいんだよ」

お婆さんはまた言った。

「けれど。いいんだね」

そのうえで尋ねる。

「地上に上がったらずまず力を失ってしまうよ」

「ええ」

ルサール力は覚悟を決めた顔で頷いた。

「精霊としての力は。それに」

さらに言う。

「力をなくしたせいで喋れなくなるし。しかも若し恋が破れたら」

「どうなるの？」

「悲しいことになるんだよ」

お婆さんは沈んだ声で言った。

「力をなくしたままここに帰ってくることになるんだ。もう水の中にも入られない」

「それって……」

「そうさ、何も出来ないままずっとここにいることになる。それでもいいのかい？」

「それは……」

「だからお止め」

お婆さんは最後と想いルサール力を止めた。

「今ならまだ間に合うよ」

「それでも」

だがルサール力の決意は揺るがなかった。

「私はあの方と一緒にいたい」

彼女は言う。

「何があっても。一瞬でもいいから」

「本当にいいんだね？」

「いいわ」

迷いはなかった。

「それでもいいから。だから」

「わかったよ」

ここまで言われてはもうそれに応えるしかなかった。

「じゃあこれをお飲み」

「これは」

お婆さんが差し出したのは青い丸薬であった。一粒あった。

「御前さんを人間にする魔法の薬さ」

「これが」

「それを飲んだら御前さんは人間になれる。そしてその王子様とも一緒になれる」

「それじゃあ」

「あげるよ。だから」

お婆さんは言う。

「御前さんの好きなようにし」

「お婆さん……」

「けれどいいかい？」

お婆さんはまた言う。

「何があっても。後悔するんじゃないよ」

「ええ……」

「それだけはいいね」

「わかったわ」

「可哀想なルサルカ」

お爺さんはそんなルサルカを感じて呟いた。

「人間なんて好きになつて」

だがそれがルサルカの選んだことだった。彼女は決めたのだ。もう迷わないと。そして彼女は薬を飲んだのであった。

湖のほとり。狩人の服をした若者がいた。

黄金色の髪に青い瞳、白い肌を持つ端正な若者だった。瀬は高く気品も漂っている。一目で彼がやんごとない身分にあることがわかる。

「この森は変わった森だな」

彼は湖の側でこう呟いた。

「何回通つても何か不思議な感じがする。まるで迷路の中になるような。この湖にしる」

ルサルカのいる湖だ。そこを除いた。

## 第一幕その五

「何度も来ているのにはじめて来たような気がする。どうしてだろ  
う」

「王子」

遠くから彼を呼ぶ声がした。

「どうした？」

「鹿はいましたか？」

「いや」

それに返事を返す。

「ここにはいなかった」

「左様ですか」

「何処に消えたのか突然いなくなった」

彼は言う。

「おかしなことにな」

「またですか」

「そうだ、まただ」

驚いたことにそれは今がはじめてではないようなのだ。

「どうということなのかな、これは」

「さて」

狩人達がやって来た。彼等にもそれはわからない。

「何故なのかな、全く」

「おかしなことがあるものです」

「この森ではそういうことばかりだな」

「はい」

「何故でしょうか」

「それは私にもわからない」

王子は首を傾げて言った。

「だが獲物がいなくなったのは確かだ」

これは否定しようがなかった。

「帰るか」

「帰るのですか？」

「獲物がいなくなっってはどうしようもないだろう」

王子は言った。

「帰ろう。いいな」

「わかりました」

「それでは」

「そなた達は先に行って用意をしてくれ」

「お城に帰る用意ですね」

「そうだ、私も後から行く」

こう家臣達に対して告げた。

「では」

「うん」

狩人達が先に姿を消す。王子は暫し湖のほとりにたたずんでいたがやがて立ち去ろうとした。その時だった。

彼の目の前に一人の少女が現われた。黄金色の長い髪に黒い瞳を持っている。雪の様な白い肌を持ちそれを灰色の、子供が着る服で包んでいる。足は裸足であった。

「そなたは」

「.....」

彼女は一言も答えはしない。じっと王子を見ているだけである。

「何故ここに。そして誰なのだ？」

「.....」

やはり返事はない。王子はそれを見て首を傾げさせた。

「口がきけないのか？」

「.....」

だがそれにも返事はなかった。ただ王子を見ているだけである。

「妖精か、はたまた人なのか」

王子はそんな少女を見て思った。

「秘密がそなたの口を封印しているのか？なら何故」

少女はやはり答えはしない。かわりに手を差し伸べてきた。

「その手は」

自分に向けられているのがわかる。

「私と共に来たいのか？」

「.....」

やはり返事はないが目もまた彼に向けられていた。

「わかった」

王子はその目を見て彼女の気持ちがあったように思えた。

「では共に行こう、私の城へ」

そう言っつて少女の手を取った。

「一緒にな。では消えないでおくれ」

少女はその言葉にこくりと頷いた。

「この深い霧に覆われた森の中で消えはしないで永遠に。私と共に」

彼は少女を連れて湖を後にする。それをあのお爺さんが見送っ

ていた。

「幸せになれるものか」

お爺さんはそう言っつてもその少女、ルサール力を見守っていた。

どうあつても彼女が心配であつたのだ。

## 第二幕その一

### 第二幕 愛は破れ

城の大広間。夜の帳が下りようとしている中を城の者達がせわしなく動き回っていた。

「ほら、まずは蠟燭だ」

「よし」

使用人の一人が大広間の所々にある蠟燭に火を点けて回っていた。その暖かい火に照らされて部屋の中が浮かび上がる。赤いカーテンに壁のタペストリー、そして大きなテーブルがそこにあつた。

「これで明るくなつたぞ」

「じゃあ次の仕事だ」

「えっ、これで終わりじゃないのか」

「何言つてるんだ、これからだぞ」

立派な身なりの執事が蠟燭を点けた使用人に対してそう言った。

「夜の仕事は灯りを点けてからはじまるんだ」

「ちえっ」

「ちえっじゃないよ」

舌打ちする彼を叱る。

「わかつたらさあ次の仕事だ」

「御褒美ははずんで下さいよ」

「はずんで欲しかったら真面目にやるんだな」

「わかりましたよ」

「じゃあお皿はそつちね」

「ええ、わかつたわ」

彼等と入れ替わりにメイド達がやって来る。

「銀の皿はここに」

「普通のお皿はここ」

「あれ、今日は銀のお皿が多いわ」

小さいメイドがそれに気付いた。

「今日のパーティーは何か特別なの？」

「ええ、そうらしいわ」

大きなメイドがそれに応える。

「ほら、この前王子様が連れて来た方」

「ああ、あの奇麗な黄金色の髪の毛」

ルサールカのことである。

「あの人の為のパーティーなんだって」

「そうだったの」

「王子様としてはあの人と結婚したいみたいだし」

「いいんじゃない？奇麗な人だし」

小さなメイドはそれに頷いた。

「お似合いだと思うわよ」

「けれどあの人って何処がおかしくない？」

大きなメイドは怪訝な顔をして小さなメイドに囁く。

「何かさ」

「喋れないから？」

「それもあるわね」

ルサールカは城に来てからも一言も話さない。話せないのだがそれを知る者はいない。

「けれど他にも」

「そういえばあの人何処から来たのかしら」

「湖の森かららしいわ」

「あの森から！？」

それを聞いた小さなメイドの眉がしかむ。彼女もあの森のことは聞いているのだ。

「それじゃあまさか」

「有り得るわよ」

「有り得るところじゃなくて本当にそうかも知れないわね」

「そうね」

大きなメイドもそれをどうにも否定出来なかった。

「あの森だから」

「けれどそれだと王子様はどうなるの？」

小さいメイドはふと自分の主のことが心配になった。

「精霊が奥様になったら」

「死んじゃうかもね」

「死ぬって」

「話は聞いているでしょ？」

大きなメイドは同僚に小声で囁きかけてきた。

「人間と精霊が付き合っていていいことはなかったって」

「若し浮気なんかしたら」

「呪いで死んじゃうし」

「けれどまさか」

あの王子様に限って、と言おうとした。だが大きなメイドは冷めた目で言う。

「裏切っても駄目なのよ」

「裏切っても」

「悲しませてもね」

「それじゃあ人間と付き合うよりずっと難しいじゃない」

「だからなのよ。今までうまくいった試しがなかったのは」

彼女は小さなメイドに言う。

「少しでも過ちを犯せば死ぬのはこっち」

「だから付き合えない」

「誰もね。それこそ奇跡が起こらない限り」

「奇跡、ね」

「そんなの滅多にないでしょう？だから奇跡なのよ」

彼女の言葉までも冷めていた。

「有り得ないことだから」

「そうなの」

「じゃあ私達は現実のことをしましょう」

同僚に仕事を急かす。

「お皿の次はお酒よ」

「もうコルクは抜かれてるかしら」

「そろそろね。だから余計に急がないと」

「わかったわ。それじゃあ」

「ええ、急いで」

彼等はいそいそと仕事をしていた。その中で他の者達もそれぞれの仕事をしている。彼等もまたヒソヒソと話をしているがそれはやはりルサルカについてであった。

「何者なのか」

「本当に人なのか」

そうした話ばかりであった。彼等もまたルサルカに目を向けていたのだ。だが。彼女が何者であるのか、確かに知ることは適わなかったのだ。誰にも。

「おかしなことだ」

王子はその中で従者に対して話していた。彼は今自室にいた。王子の部屋にしてはかなり質素な部屋である。あまり派手な装飾もなく落ち着いたものであった。

## 第二幕その二

「話はいつもあの娘のことばかり」

「はい」

従者はそれに応える。

「だが彼女は一言も話さない。これはどういふことなのだ」

「お医者様のお話では」

「ああ、どうなのだ」

彼は従者の言葉に顔を向けさせた。

「お口や喉には何も変わりはないようなのです」

「では話せるのか？」

「お医者様のお言葉では」

「だが彼女は黙ったままだ。これはどういふことなのだ」

「司祭様のお話では人ではないのではと」

「精霊か」

その可能性を疑った。

「まさかとは思いますが」

「うつむ」

王子はそれを聞いて顎に手を当てて考えはじめた。

「精霊か」

「どうされますか？」

従者は考えだす主に問うた。

「別れますか？」

「いや」

だが彼はそれを断った。

「どうせこのまま飼ひ殺しの身分だ」

彼は言った。実は彼はこの国の第十二王子だ。婚姻政策からも漏れてしまっている。本来ならばこのまま朽ちていくだけの立場だったのである。

「そんな私に好きな人が出来たのだ。それがどういふことかわかるだろう?」

「ええ、まあ」

従者は応えた。

「それでは」

「だがな」

それでも王子にとって無視できないことが確かにあった。

「彼女が精霊だったならば」

「御結婚は無理ですか」

「出来る筈もない。確かに縁談すら来ない立場だが」

彼は言う。

「それでも人でない者と結婚するのは出来ないだろう」

「司祭様もそう仰っていました」

「当然だ」

そこまで言って苦い顔を作った。

「人であることを祈るが」

「精霊であったならば」

「その時は残念だが」

「別れるしかない」と

「彼女に直接聞きたいが」

だが彼女は話せない。余計に問題は入り組む。

「どうしたものか」

「では試されては?」

従者はそつと提案をした。

「試すだと!?!」

「はい、試してみるのです」

彼はさらに言う。

「彼女が本当に人であるのかどうか。若し人であればそれでよしです」

「どうやってだ」

「まずは彼女を呼んで問うのです」

「話せと」

「そして十字架を見せて」

「怯えたならばか」

「それではつきりします」

精霊は人ではないので十字架を怖れるとされていたのだ。

「これならどうでしょうか」

「そうだな。それで行くか」

「はい」

「では彼女を呼んでくれ。そして司祭も」

「わかりました。それでは」

「場所はここでいい。そこでやろう」

「はい」

こうして話の場も決まった。ルサールカと司祭が呼ばれる。彼女は司祭を見てその白い顔をさらに白くさせていた。それは王子も見ている。

（まさか）

そんな彼女の顔を見て疑念が高まる。

（精霊なのか。ならば）

別れるしかない。だが。

（それでも）

別れたくはないとも思う。彼はもうルサールカの美貌に心奪われだしていたからである。それに自分も気付いていた。だがそれでも王子という立場が。彼を留まらせていたのだ。

「よく来てくれた」

そうした心の動きを隠してルサールカに顔を向ける。

「実はそなたに聞きたいことがあってここに呼んだのだ」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

ルサールカは答えはしなかった。

「そなたは。私のことをどう思っているのだ？」

彼は問う。

「あの湖で出会ってから暫く経つ。だがまだそなたの返事を聞いてはいない。だからだ」

「是非お答え下さい」

従者も言つた。

「王子様の御質問に。宜しいですか」

「.....」

だがやはり返事はなかつた。ルサール力は俯くだけであつた。

「そなたは一体何者なのだ？」

王子は心配そうな顔で問う。

「一体何処から来たのだ？教えてくれないか」

「.....」

だがやはり返事はない。沈黙したままだ。

## 第二幕その三

「答えられないのか？」

王子はそんなルサルカに対して言う。

「話せない身体なのか、それとも理由があるのか」

「.....」

「黙っていてはわからないではないか」

「少しずつ苛立ちを覚えてきた。」

「話せないのなら。どうしたのだ」

「王子」

司祭がそんな彼女を見て王子に声をかける。

「この者はやはり」

「精霊だというのか!？」

「御言葉ですが」

彼は言う。

「間違いないかと」

「まことか!？」

再びルサルカに顔を向けて問う。

「そなたは精霊であると。司祭が申しているが」

「.....」

「黙っていてはわからんではないか」

「次第に苛立ちが募る。」

「話せぬのか?そなたは人だな」

「.....」

やはり一言も発しない。これでは自分が何者なのか言っているのと同じであった。

「王子、やはり」

「従者も声をかける。」

「いや、待て」

苛立つてはいたがそれでもまだ彼は諦めてはいなかった。

「もう一度聞こう」

ルサールカの整った顔を見て問う。ルサールカもまた王子の顔を見ている。

「そなたは人であるな」

「.....」

だが答えはなかった。そのかわり悲しそうな顔で王子を見ているだけであった。その顔で充分であった。

「やはり答えはないか」

「王子」

司祭と従者が彼にまた声をかける。

「やはり」

「だが」

どうするべきか。彼は躊躇いを見せた。そこで急に扉が開いた。

「誰だ、今は下がれ」

王子は開いた扉に顔を向けてまずはこう言った。

「重要な用件があるのでな」

「その重要な用件でお話があるのです」

「！？そなたは」

王子がその入って来た者に顔を向ける。ルサールカもまた。するとその者の顔を見た彼女の顔に驚きの色が瞬く間に走った。

「私は水の精です」

青い髭と目、そして服の蒼ざめた老人であった。その姿だけで全てがわかった。

「何っ、では」

「ルサールカ」

お爺さんはルサールカに顔を向けた。とても悲しい顔をしていた。「可哀想に。だから言ったのに」

だが彼女を叱ることはなかった。そう言っただけであった。

「これでわかっただろう。精霊と人間達は永遠に分かり合えないの

だよ」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「さあ、湖に戻ろう。白い花も緑の木々も紅の薔薇も御前を待っているよ。そして青いあの優しい湖も」

「まさか水の精霊がこんなところにまで」

「馬鹿なことと言われるか？」

お爺さんはゆっくりとした動作で司祭に顔を向けた。

「可愛いルサルカの為にここまで来た老いぼれを。愚かと仰るなら仰ればいい」

「それは・・・・・・・・」

「ここには花も木も薔薇もないから。さあ帰ろう」

ルサルカを抱き締める。すると彼女の髪と目が青くなっていく。そして話せるようになった。お爺さんが魔法を解いたのである。そのルサルカを思いやる心で。

「お爺さん・・・・・・・・」

ルサルカもお爺さんを抱き締めた。その目から一条の涙が伝わる。

「帰るね？」

「帰らなくてはならないの？」

「そっだよ」

お爺さんは優しい声で言った。

「だからね」

「・・・・・・・・わかったわ」

「真に精霊だったとは」

王子は蒼白になって抱き合うルサルカとお爺さんを見ていた。

「こんなことが・・・・・・・・」

「精霊であつたならばどうだといつのです？」

お爺さんはその王子に対しても言った。悲しい声で。

「ルサルカは本当に貴方を愛していたのに。貴方は話せないといっただけで」

「・・・・・・・・・・」

頂垂れる。今度は王子が沈黙する番だった。

「これ程にまで責めて。ルサールカは言葉を捨てて貴方のところに入ったのに」

「言葉を捨てて・・・・・・・・・・」

「姉や妹達も捨てて。何もかも捨てて貴方の側に参ったのに。それなのに貴方は」

「そうだったのか・・・・・・・・・・」

「しかし所詮は」

「さつきも言いましたが精霊だからいいというのならそれでいいでしょう」

また司祭に言い返した。

「ですが。精霊もまた生きていて恋をするのです」

「うつ・・・・・・・・・・」

これには司祭も何も言い返せなかった。

「そしてその為には犠牲も厭わないのです。人と同じように」

「人と同じ・・・・・・・・・・」

「そうです」

今度は王子に言った。

「同じなのですよ。だから今ルサールカは泣いているのです」

自分の腕の中でさめざめと泣くルサールカに顔を向ける。

「さあ帰ろう。湖の中に」

「けれど」

「もういいんだよ。御前は何も心配しなくていいから」

ルサールカを優しく抱いて言う。

「だから」

「けれど私は」

王子の方を見る。彼と目があつた。

「うつ」

ルサールカと目が合い言葉を詰まらせる。背けはしない。だがそ

の何処までも悲しい目に言葉を失ってしまったのだ。

## 第二幕その四

「あの人の側に」

「もう駄目なんだよ」

「そんなルサールカに言い聞かせる。」

「終わったんだ」

「けれど」

「何もかも終わったんだ。だから」

「そんな……」

「さあ帰ろう」

お爺さんは最後に言った。

「もうここにはいけないから。あの優しい湖の中に」

「お爺さん……」

二人は水に変わりそのまま霧の様になって姿を消した。後には何も残ってはいなかった。

「精霊でもか」

王子は二人が消えてしまったのを見て頂垂れて呟いた。

「生きていて恋をする」

「王子……」

そんな彼に従者が心配して声をかける。

「知らなかった。人でなくてもそうだとは」

「それは……」

司祭も何も言えない。豊かな学識を持つ彼もそうしたことには知らなかったのだ。とりわけ恋に関しては。彼は何も知りしなかったのだ。

「私はどうすればいい？」

彼は問う。

「どうすればいいのだ、これから」

「それは……」

従者も司祭も答えられなかった。王子は項垂れる。彼等は何をしていいのかわからなくなってしまうていた。自分達のはってしまったことに對しても。

ルサルカは湖に戻った。髪の色も目の色ももう精霊のそれに戻っている。だが。心はそうではなかった。

「ねえルサルカ」

お爺さんが湖のほとりで悲しそうに俯く彼女に声をかける。

「もう、笑わないのかい？」

「御免なさい」

ルサルカは悲しい顔でそれに答える。森は夜の帳に覆われておりあの時の白銀の月が見える。しかしルサルカはそれを見ようとはしない。

「もうこの奇麗な湖を見ても美しい森を見ても何も思えないの」

「そうなのかい」

「ええ」

悲しい顔のまま頷く。

「どうしても」

「やはり。まだ忘れられないんだね」

「・・・・・・」

その言葉には答えはしない。

「今も。そうなんだね」

「・・・・・・ええ」

沈んだ声でそれに返す。

「そうなのか、やっぱり」

「どうしても忘れられないの、私」

「姉さん達や妹達が心配しているよ」

「それもわかつてるわ」

彼女はそれにも答える。

「けれど」

「そうなのか」

「あの方のことばかりなの。思うのは」

「けれどね、ルサルカ」

お爺さんはルサルカを諭す。

「もう一度来たらどうなるかわかっているのかい？」

「どうなるの？」

「あの王子は御前を裏切ったんだ」

お爺さんはまずこう言った。

「それは……」

「精霊達の中で恋の裏切りがどれだけ罪深いことは知っているね」

「知ってるわ」

ルサルカも精霊である。それを知らないわけではない。

「恋の裏切りは死」

暗い声で呟く。

「そう、死なんだ。その時はあの王子は死なないといけない」

「どうしても？」

「そう、どうしても」

お爺さんは言う。

「死ななくてはならない。それが掟なんだから」

「けれどそうだったら」

「同じだって言いたいんだね」

「王子様がいなくなったらそれは」

「けれどどうしようもないんだ」

「どうしようも」

「だから。もう諦めるんだ」

お爺さんはまた言う。

「あの王子のことは。いいね」

「それは」

出来ないと言おうとする。言いたかった。けれどそれは。

「わしはあの王子が来ないことを祈ってるんだ」

おじいさんの言葉に防がれてしまった。

「そうしたらあの王子は死ななければいけない。御前がもつと悲しむことになるだろう?」

「お爺さん………」

「悲しみは早くお忘れ。そして新しい恋に生きるんだ、いいね」

「新しい恋なんて………」

「考えることも出来はしない。」

## 第二幕その五

「もう私には……」

「今じゃなくてもいいんだよ」

その言葉で優しくルサルカを包もうとする。

「いいね、それで」

「それは……」

ルサルカは答えられない。どうしてもそれを言うことは出来なかった。

「さあ湖の中に帰ろう」

お爺さんはまた優しい言葉をかける。

「皆のいる湖に。いいね」

「いえ、今は」

だがルサルカはそれを断った。

「まだここにいたいから」

「そうなのかい。じゃあ何時でもいいから」

ここは彼女をそっとしておくことにした。

「気が向いたら戻っておいで。いいね」

「はい」

こくりと頷く。お爺さんは静かに湖の中に入って行く。その後はルサルカだけが残る。彼女は悲しい顔のまま項垂れていた。

湖にあの月が映る。あの銀色の月が。彼女の目にもそれは入っていた。

「あの時の月ね」

ルサルカはその月を見て呟いた。

「あの時の月へのお祈りはもう」

届きはしない。誰にも。それを思うとまた悲しくなる。

「どうにもなりはしないのね。私も」

「あっ、いたいた」

そんな彼女を見て声があがる。

「ルサールカだ、やっぱりここにいたよ」

「よかった、何処に行ったかと思ったよ」

「誰!？」

声の方に振り向くとそこには木の精達がいた。彼等は明るい顔をルサールカに向けていた。

「貴方達」

「探したんだよ、ルサールカ」

彼等はルサールカに対して言う。

「何処に行ったのかって」

「けれどここにいたんだね。よかったよかった」

「私を探してたの」

「うん」

彼等は答える。

「そうだよ」

「どうしてなの？」

「君を探している人がいるから」

「私を探している人？」

ルサールカはそれを聞いて首を傾げさせる。

「風の精のお兄さん？」

「違うよ」

「じゃあ花の精の小さな男の子かしら」

「あの子でもないよ」

小さいがルサールカに首ったけの可愛い子である。

「それじゃあ誰かしら」

「とても綺麗な顔の人だよ」

「綺麗な」

そう言われても今一つわからない。首は傾げたままだ。

「ええと」

「金色の髪だね」

「金色」

「白い顔をしたとても綺麗な人だよ」

「まさか」

ルサルカは彼等の言葉を聞いてハツとした。

「それってまさか」

「そうだよ、人間だよ」

「王子様。何でもルサルカに用があるんだってさ」

「何でここまで」

「それでどうするの？」

木の精達はルサルカに尋ねる。

「えっ」

「会うの？会わないの？」

「それは……」

ルサルカにはその先はとも言えなかった。口籠もってしまう。

「会いたいんでしょう？」

「けれど……」

「会いたいなら会えばいいじゃないか」

「そうそう」

事情を知らないからこそ言える言葉である。だが彼女の心に届く。

「じゃあ呼ぶよ」

「会いたいみただし」

「ちよつと待って」

そんな彼等呼び止めようとする。

「それは」

「いいんだって」

何もわからないまま言う。だがそれがルサルカを動かす。

「ルサルカはここにいればいいから」

「僕達に任せて」

「けれど」

「けれども何もないんだよ」

「会いたければ会えばいいのさ」

「会ったら……」

王子は死んでしまう。それを言おうとするが木の精達はそれより先に言う。どうしても彼等の方が早い。

「会わないで後悔するより会って後悔するだよ」

彼等は戸惑い続けるルサルカにはつきりと言い切った。

## 第二幕その六

「会えばそれで全部はじまるんだから」

「何があつてもね。暗いものなら振り払う」

「振り払う……」

「そうさ、それでいいんだ」

「変えられないものなんてないんだから」

「ないのかしら、本当に」

「ないよ」

彼等はまた言う。

「絶対にね」

「だからルサルカも」

彼女を急かそうとする。

「元気を出して」

「胸を張って。暗いものなら明るくする」

「愛は何よりも強いんだから」

「愛は何よりも強い……」

「そうだ、だって僕達は誰かを愛する為に生きているんだよ」

人間も精霊もそれは同じであった。

「その前には何だつて恐くはないさ」

「死ぬことだつてね。それを生きることに変えられるんだ」

「それは……」

そのものをはつきりと言った言葉であった。何も知らない彼等だからこそその言葉だった。全てはルサルカを励ます為だったがそれは湖の水の様に彼女を包み込んだ。

「わかったよね」

彼等はもう一度問う。

「じゃあ僕達行くから」

「待っていてね」

「あつ……」

木の精達はもう去って行った。後にはルサールカだけが残った。

「死ぬことだつて」

残された彼女は先程の言葉を反芻する。

「生きることに。そんなことが……」

出来る筈がない。そうわかっている。だが。その言葉が彼女の心を包み込んだのもまた事実であった。

「けれど出来たら」

ふとそう思う。

「そうすれば私は」

何かそれに賭けてみようと思つた。愛が本当に何よりも強いのなら。それを信じてみようと思つた。

意を決して顔を上げる。湖に戻って来てからはじめて。すると目の前にあの王子がもう立っていた。

「やはりここにいたか」

王子はルサールカを見るとまずこう言つた。

「あの子供達に言われた時はまさかと思つたが」

「どうしてこちらへ？」

ルサールカは彼に問う。

「ここは。人の場所ではないのに」

「そなたに会いに」

彼は言つた。

「あれから考えたのだ、私も」

「何を」

「自分が何を思っているのか。そなたをどう思っているのかな」

ルサールカの目をじつと見て言う。その目は青い瞳と合わさり離れることはない。

「それでわかつたのだ」

そのうえで言う。

「精霊でもいいのだ」

「精霊でも」

「そうだ、そなたが人であっても精霊であっても」

目はルサールカの青い目からずっと離れない。

「そんなことはどうでもいい。やはり私は」

「けれど」

ルサールカは目を逸らそうとする。だがそれは適わなかった。ど  
ういうわけか顔が動かなかつたのだ。動かすことが出来なかつたの  
だ。それは自分でもどうしてかわからなかつた。

「私はもう」

「話は聞いた」

王子は言う。

「精霊を裏切つた場合の罪は。それは死だな」

「はい……」

その言葉にこくりと頷く。

「御存知なのですね」

「司祭からな。彼には止められた」

「ここへ来るのを」

「だが私は構わないのだ」

まだルサールカを見ている。

「そなたを愛していることに変わりはないから。罪なら受けよう」

そこまで言う。

「だからそなたを」

「お帰り下さい」

ルサールカはそんな彼を拒絶した。

「私と一緒にになることはこの世ではできないのですから」

「ならそれで構わない」

彼はまた言う。

「そなたと少しでも一緒にいられるのなら」

「そこまで……」

「だからここまで来たのだ」

「私の為に……」

「そなたと共に」

目を見るその目の光がさらに強くなる。

「少しでも一緒に」

「私は永遠にいたい」

ルサルカはその目から涙が零れ落ちた。

「一瞬などではなく永遠に。貴方といたい」

「ルサルカ……」

「だから少しなどと言わないで下さい」

王子を見据えて言う。

「わかった」

王子はその言葉に頷いた。

「では。永遠をそなたと共に」

「はい……」

ルサルカの手が自然に動く。そつと前に出た。

「永遠に私と」

「永遠にそなたと」

王子も手を前に出す。

「一緒に……」

二人の手が触れ合った。その時だった。

奇跡が起こった。何とルサルカの髪が再びあの黄金色になったのだ。

それだけではなかった。奇跡はまだあった。

「これは……」

顔の横から見えるその豊かな黄金の髪に気付いて声をあげた。そ  
う、声が出たのだ。

「どうということなの!？」

自分でも何が起こったのか掴めていない。

「何故声は……」

「奇跡なのか!?!まさか」

「そう、奇跡じゃ」

王子も驚いていると湖の中からお爺さんが姿を現わしてきた。

## 第二幕その七

「お爺さん」

「わしも信じられんが奇跡が起こったのじゃ」

お爺さんは言う。

「本来ならば今ので王子は死んでおった」

「やはり」

「精霊の世界での裏切りは死、だからそうなる筈じゃったのだが」

「私のこの髪は」

「奇跡の証じゃよ」

ルサールカにまた述べた。

「愛の奇跡じゃ。王子が助かっただけでなくルサールカはもう一度人になれた。そして」

さらに言う。

「声もそのままなのじゃ」

「どうしてこんなことが……」

「神の祝福なのかもな」

「神の……」

お爺さんの言葉に呆然としたように応える。

「左様、あくまで王子を想ったルサールカと死をも受け入れてルサールカのところへ来た王子への。神の祝福なのかもな」

「神が」

「私達を許して下さいったのか」

「わしも長く生きたがこんなことははじめてじゃ」

お爺さんは大きく息を吐き出して述べた。

「人と精霊の恋が実っただけでなく。奇跡まで起こるとは。だがこれは事実なのじゃ」

「王子様、私は今度は」

「ああ、今度こそそなたを離しはしない」

二人は見詰め合つて言い合う。

「ずっと一緒に」

「永遠に。同じ時を暮らそう」

「さあ、行くがいいルサルカよ」

「お爺さん……」

「そなたはもう人じゃ。じゃがわし等のことは忘れないでくれよ

「はい……」

お爺さんの言葉にくくりと頷く。

「わかりました、ずっと」

「わしのこともな」

「お婆さん」

お婆さんだけではなかった。姉や妹達も姿を現わす。

「こんなことはわしの魔法でもないことじゃ。こんなことがあるとはのう」

「ルサルカ、貴女は今奇跡を実らせたのよ」

「私達はそんな貴女の幸福を見られたのね」

「姉さん、そして妹達……」

「ルサルカおめでとう！」

「何かよくわからないけれどその王子様とよりを戻したんだね」

「貴方達も」

木の精達もそこにやって来てルサルカを祝う。

「皆祝福してくれるのね、私達を」

「そうじゃ。だから笑顔でお行き」

お爺さんが皆を代表して声をかける。

「お城へ」

「けれどたまには思い出してね」

姉や妹達も言う。

「私達のことも」

「わしのこともな」

お婆さんも当然そこにいる。

「僕達もいるから」

「ここにいるからね」

「ええ、また来るわ」

ルサールカは笑顔でそれに応える。

「その時はまた」

「私もよければ」

「勿論じゃよ」

お爺さんは今は王子にも明るい顔を見せていた。

「二人はいつも一緒なのじゃから。無論」

「二人でどうぞ」

「待つてるよ」

水の精達も木の精達も声をかける。

「宜しくね」

「ああこちらこそ。ではルサールカ」

「ええ、王子様」

二人は手を取り合って見詰め合う。そして湖から離れていく。

「私達の出会いの湖よ、今はさようなら」

「そしてまた来るその日に再会の言葉を」

「待つておるからな」

お爺さんがまた言った。

「ではな」

「その時また」

「ええ、また」

「会う日まで」

二人と精霊達は別れた。そして王子とルサールカはそのまま城へと向かう。二人が永遠の愛を過ごす城へ。もう二人の間にわだかまりはなかった。愛が全てを消し去り、結びなおしていたのだから。愛は奇跡を起こし、全てに勝る。愛より尊いものはこの世にはないのだから。

ルサー  
ルカ

完

2  
0  
0  
6  
・  
9  
・  
9

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4142f/>

---

ルサルカ

2011年4月28日00時35分発行